



特集

# 随筆を書く

「随筆を書く」のよび、小学校学習指導要領で明示されている言語活動です。しかし、「ふわゆる作文の指導」との違いが、よくを交えるところの「と」つ、先生方の声をよく耳にします。

中学校での「書くこと」を見据えながら、小学校高学年で随筆を書くことの意味、どのようなものが書ければいいのかを考えることで、指導のヒントを探れたらと思います。

撮影：鈴木俊介

## 対談 「かつこいい書き方」を楽しもう



筑波大学附属小学校教諭  
青山由紀

お茶の水女子大学附属中学校教諭  
宗我部義則

随筆を授業に位置づけるとき、何を大切にしたらよいのでしょうか。そもそも、どんな文章が書ければよいのでしょうか。アイデアあふれるさまざまな実践を、小学校でされている青山先生と、中学校でされている宗我部先生に、「随筆を書く」という授業について語り合っていました。

### 「随筆を書く」実践

青山 学習指導要領で「随筆」の明示があるのは、「書くこと」の領域のみです。でも、読んだことがないものは書けませんから、実際には、随筆を読んだから書くという流れで指導することになります。

宗我部 教科書ではどのように教材化されているのでしょうか。

**青山** 「自分を見つめ直して」(六年P182)という教材があります。初めに「ふわふわの雪」という中川李枝子さんの短い随筆とともに、随筆についての説明が示されています。その後、題材探しのための語群と児童作例をもとに随筆を書くという流れです。モデルとなる文章を読んで理解してから書くということですね。

**宗我部** 先生は、どのような実践をなさったことがありますか。

**青山** 実践として初めて取り組んだのは、十年ほど前です。随筆を幾つか読んだ後に、「十二歳、私の主張」という題名で随筆を書くというものです。子どもが読める随筆的な文章が世の中に加え、読書のときに随筆を選ぶ子どもが多くなってきたのもあって、学習に位置づけてみたくです。

**宗我部** 子どもたちは読書をする中で随筆に出会ってきていたわけですね。

**青山** ええ。五年生の頃から、「天声人語」などを読むことは続けていましたしね。授業では、『自分の木』の下で『大江健三郎／朝日新聞社』と『対訳 21世紀に生きる君たちへ』(司馬遼太郎／朝日出版社)を取り上げました。どちらも、子どもに向けたメッセージが書かれています。それで、その後、自分の生活をヒントに、伝えたい相手に向

けたメッセージを書くという流れにしました。「卒業單元」として行った実践なので、やや意見文に近いものになっています。

### 自分を出させる工夫が必要

**青山** このときに感じたのは、六年生って、そろそろ自分を出したがいなくなる時期だということですね。「かつこ悪い」という雰囲気があるのは、かつこ悪い」という雰囲気がある子どもたちの中に出てくるんです。

**宗我部** 経験上、よく分かります。中学生くらいになると、自己開示させる工夫が必要ですね。「自分を開け」と言っても開かない子どもたちですからね。

**青山** このときは、まず伝えたい相手とメッセージを決めて、それを伝える具体例

業で子どもたちに書かせるとき、どのように考えていらつしゃいますか。

**青山** 私は、小学生段階ということも踏まえて、「想定する相手に伝えたい思いや考え、メッセージと、それを伝えるための具体的なエピソードが語られていること」が必要だと考えています。メッセージという少し意見文に近いけれど、随筆として書かせるので、文章全体としての主張が明確でなくてもいい。だから、「ぼんやり伝わってくる」という文章でも、よしとすることができるとです。

**宗我部** 中学校の学習指導要領には随筆を書くことは明示されていませんので、多様な文種の文章を書くという意味で考えていくことになりそうです。私自身は、「書く」とする物事を対象化しているかどうか」が、随筆が、いわゆる作文とは違うところなん



あおやま ゆき  
**青山由紀**

東京都生まれ。筑波大学大学院修士課程修了。私立聖心女子学院初等科を経て、平成10年より現職。日本国語教育学会常任理事、全国国語授業研究会常任理事。著書に「古書が好きな子になる」(光村図書)、「板書きれいで読みやすい字を書くコツ」(ナツメ社／樋口咲子共著)などがある。光村図書 小学校「国語」教科書編集委員を務める。

としてエピソードを考えさせました。それから、これまでに読んできたものをもとに、誰の文体に倣って書くかを決める。例えば「大江健三郎」風だと「——」が多いとか、子どもたちなりに特徴を見つけ、まねて書いていました。「○○風」と、誰かの文体に乗せることで、恥ずかしがらずに自分を出して書くようになるというのが、このとき分かったことです。

**宗我部** 私もよく考えています。役割や立場などに仮託した形で書かせることで、自分の中にあるものが全て出てくるんですよ。

**青山** 自分を出さなければ、低学年の「したこと作文」と同じです。だからこそ、この言語活動が高学年に位置づけられているのだと思うのですが、指導の際にはひとひねり必要ですね。

**宗我部** ええ。

だと思っんです。随筆には、自分がある出来事の渦中にいて思ったことを、今、自分はどっと思っっているか、ということが書かれている。この部分が、先生のおっしゃるメッセージに当たるんでしょう。

**青山** なるほど。

**宗我部** 最近の自分の実践を思い返して、「随筆」といえるものがありました。中学校三年生の『おくの細道』の学習です。『おくの細道』を読んだ後、「私にとっての旅とは」「旅を生きた」「旅を思う」などの中から選んだ題名で文章を書くことを、学習のゴールとしました。芭蕉の文章や言葉を必ず引用し、自分にとっての旅について書くんです。そうして書きあがったものが、まさに随筆だったんです。

例えば、こう書いた子がいました。「芭蕉のように、何もかも捨てて旅立つことに

すよね。

### エピソードと対象化

**宗我部** そもそも「どういった文章が随筆なのか」が、現場の先生方の一番の悩みどころなのではないかと思っんです。先生は、授



そがべよしのり  
**宗我部義則**

埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題(中学校国語)」作成および分析委員。平成20年告示「中学校学習指導要領解説国語編」作成協力者。編著書に「群読の発表指導・細案」(明治図書出版)など。光村図書 中学校「国語」教科書編集委員を務める。



## 随筆って、

# 書くことで自己成長が促されるもの。

青山

### 対象化の工夫

は憧れるけれど、結局、私たちにそれはできないだろう。そして、だからこそ旅に憧れる」。自分が思う旅のイメージ、そう思う自分を対象化して見たときに思うことが書かれています。小学生には少し難しいかもしれませんが、ぜひ読んでね。

**青山** 一段高い、「メタ」な視点から自分を見るわけですね。

**宗我部** そうです。子どもは自覚していませんが、それがまさに「自分を語る」ということ。おそらく、対象の見方と表現のしかた（文体・スタイル）、この二つが合体したときに、いわゆる随筆という文種が立ち現れるのでしょう。先生のご実践にもその両面が仕込まれていました。「この二つを意識して書かれていればいいじゃないか」と、開き直れるといいですね。なにしろ、一番に味わわせたいのは、自己を表現していく楽しさです。

な表現では、随筆としての価値が軽くなってしまうものね。

**宗我部** あとは、「世の中ではこう考えられている。でも、自分は——」と、「逆接の接続詞を入れる」という型をもって書くことでも、対象化が進みそうです。

**青山** 述べ方のパターンを知っておくのはいいですね。表現力の素地になります。

**宗我部** そうです。そして、型のようにだけ、実は、これこそ「見方」そのものなんじゃないでしょうか。そんなに広く世の中の見方が語れるような経験をもっていない子どもたちです。「世の中では——」と書いていても、それは自分のそれまでの見方が投影されたもの。だから、逆接を使

**青山** どんな出来事をエピソードとしてと

るかで、小学生でも、ある程度の対象化はできる気がします。エピソードには、出来事の当事者として自分が渦中にあるものと、出来事を見聞きしたというものがあろうでしょう。見聞きした時点で、後者にはすでに「メタ」な視点が含まれている。だから、こちらを取り上げることで、対象化のハードルはぐっと低くなるように思うんです。

**宗我部** おっしゃるとおりだと思います。とても難易度の高いことですから、最初からある程度、対象化できているものを取り上げるといいですね。自分の中からあふれ出す言葉を自由に紡がせることももちろん必要ですが、自分を出しやすい形を用意するのはとても大事なことのような気がします。

**青山** 題名の与え方によっても、対象との距離を作ることができそうです。先生がな

うことで、そのときに改めて考えて気づいた見方が引き出されてきます。

### 自分を書き表す 楽しさを大切に

**青山** 『おくの細道』の学習の後、子どもたちの、ものを見る目に何か変化はありましたか。

**宗我部** 「物事をちよつと俯瞰して見る」「何気ないものに目を留めて、意味づけする」など、「見方」をもち帰ってくれたような気がしますね。先生はいかがでしたか。

**青山** 物事の見方を少し意識するようになったと思います。ただ、それには交流がポイントです。友達の文章を読んだ後の「こんな角度からの見方があるのか！」という気づきは心に残るものだから。そして、子どもたちはこれを楽しんでいるので、書くことへの抵抗が和らいだようでした。

**宗我部** そういう気づきが、中学校へと



さったように、「私にとっての○○」とすると、評価や価値づけせざるをえなくなる。**宗我部** なるほど。「私にとって」と語るときに、「こうあるべきだと自分は思う」というのがより強く出れば意見文や説明文に近づくし、「こんなよさや特徴がある」というのがより強く出れば評論文に近づく感じがしますね。それと、「私にとって」と書くときには、それを経験したり見聞きしたりした「自分にしか」書けないものを求めたいと思います。一見、典型的でステレオタイプのようなものでも、その子が自分の経験の中で見つけてきた瞬間が表れていれば、文章になったときの力は全く違ってきます。そういう瞬間を捉えられる手立てを考えることが大事です。

**青山** 経験が表れていないステレオタイプつながるのでしよう。でも、きつと実際は、随筆を含めた多様な文種を書くうちに、徐々に芽生えてくるものだと思います。「一度書いたら、劇的に変わった」という、かっこいいものではないんですけどね(笑)。

**青山** 随筆って、書いたことや書くために考えたことが全部、自分の内面に返ってくる。自己成長が促されるという点で、小学校高学年から中学生の、揺れ動く子どもたちにとって、意味のある文種だと思います。だから、「売り物となるような、きちんとした形で書く」ことを追究する必要はないんじゃないでしょうか。そこを求めると、先生も苦しいし、子どもも、苦しくて書くことが嫌になってしまふ。何を大事にするか、しっかりと見据えて指導しないといけないですね。

**宗我部** そうかもしれません。実生活で、子どもたちが随筆を書く場面はほとんどないでしょう。生活を支える力を身につけるというよりは、随筆を書くことを通して、

## 自己を表現していく楽しさを

## 一番に味わわせたい。

宗我部





認識や表現が磨かれることを期待するという指導がしつくりきます。中学校の立場としては、小学校では、「こんなかつこいい書き方も自分でできるんだ」というおもしろさ、自分を書き表す楽しさを、子どもたちが味わえるようにしてもらえたらと思います。書き方の部分は、中学校でより深めていくことができます。

**青山** そうですね。自分が読んだことがある文章をまねして書く程度でいい。今や、あまんきみこさん、工藤直子さんのものなど、子どもが読むのに適した話題と分量の随筆がさまざまにあります。モデルにする文章には苦勞せずとも出会えますからね。

**宗我部** 子どもたちの関心に触れやすい作家のものからモデルを選んで、教室にそろえたり、授業で扱ったりするというのはいいですね。幾つも重ねて読むことで、「随筆って、こういうものなのかな」と、なんとなく分かってくるところもあるんじゃないでしょうか。

## キーワーズを「うっかり」

**青山** 随筆には、重きの置き方によって、中学校で論説や評論に枝分かれしていく「入り口」になるというよさがあるんです

ね。「随筆とは」と突き詰めるのではなく、「自分が経験・見聞きしたエピソードを中心に」程度の条件を念頭に置き、あとは気楽に取り組んでいけたらと思います。

**宗我部** それから、ものの見方に触れることも。「この人らしさ」のよさが感じられるのはどこか」などと問い返すことで、モデルの文章に、内容的にも触れていくようにしたいものです。

**青山** キーワードは、「〇〇らしさ」ですね。

**宗我部** ええ。モデルの文章を読み、「いいな」と思う点を指摘し合うことで、その人の見方や表現のおもしろさ、「らしさ」が浮き彫りになる。それが、随筆的なものの見方につながっていくのでしょうか、自分が書くときのモデルにもなっていくはずですよ。

**青山** 教科書の「ふわふわの雪」の扱い方も工夫ができそうです。「随筆とはこういうもの」というためだけに「示すのではなく、中川さんらしさがどこにあるか立ち止まらせてから、書くことに入るのがいいですね」  
**宗我部** そういうことの積み重ねで、少しずつ、経験を対象化して見る目が養われていくんだと思います。